

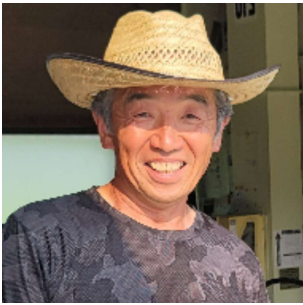
あさご 農業委員会だより

認定農業者

認定新規就農者の紹介

認定農業者

小谷 秀之 様



小谷さんは約15年前から兼業農家として農業に携わってこられました。当初は本業の仕事と両立しながら水稻を中心に作業をされていましたが、年々耕作面積が広がる中で、より本格的に農業に取り組みたいという思いが強くなり、2年前に会社を退職し、専業農家として新たな一步を踏み出されました。

その後、認定農業者として認定を受け、補助金制度も活用しながら農業機械や設備を充実させてこられました。現在は水稻7ha、ピーマンを中心に栽培されてお

り、地域の農業を支える存在となつていきます。

ご家族は、お母様を含めた4人家族で、普段は小谷さんお一人です。農作業を担っておられますが、休日などは御息もお手伝いされるなど、家族みんなで協力しながら営農されています。

また、後継者について「子どもは、持てたことにしたい」と家族を思う温かい気持ちで話してくださいました。

地域では貴重な専業農家として、今後も長く農業を続けていきたいことを願っています。これから小谷さんの取り組みに注目し、応援していきたいと思っています。



発行
朝来市農業委員会
令和7年9月
Tel.079-672-2833
(直通)

認定新規就農者
森田 慎平 様

森田さんは、東京でフランス料理店長として勤務されたのち、肥料メーカーに勤めておられました。その後お父様の年齢や体調のこともあり帰郷し就農されました。

令和7年5月に「森田農場株式会社」を設立され、水稻2.4ha、芝草1.4haを栽培されています。また他の農業者と連携し枝豆やねぎをはじめ色々な作物にチャレンジされています。

規模拡大にも勢力的で水稻ではドローン直播・マルチなどの技術を活用し省力化・増収・品質向上を図りながら、ひとまず20haを目標とし芝草も拡大していきたいとのこと。

また緑化資材の販売代理店・耕蓄連携として神戸の大手畜産業者と提携し良質な堆肥の販売・散布事業にも取り組まれ

ており、特に「耕蓄連携」には大きな将来性を感じていると語られています。

現在は舞鶴の子供食堂にお米などの食料を提供されています。身内に交通事故で寝たきりになった方がいたことから社会貢献に熱意を持っておられ、フードバンクNPOの設立を目指し生活困窮者や福祉施設の一助になりたいと話されました。

農福連携事業にも取り組まれており、サツマイモの洗浄やヒゲ取りなどを委託されています。

「地域農業の課題」を聞かけると、土地改良事業の推進と答えられ、地元農業者は小規模圃場を数多く耕作している中で時間・手間・経費に比べ収量収入が低いという現状を大規模化することで時間・手間・経費を削減し更に規模拡大することで増収につなげていくべきと語られました。

森田さんとお話しているとその知識の豊かさに驚きました。多方面にアンテナを張られ熱心に勉強されている証です。社会貢献活動を熱く語られ大きく広い視野で優しい気持ちを持つておられると感じました。一言でいえば「頼れる人」です。

地域農業のリーダーとして最適で不可欠な方と確信しました。

オオキンケイギクを駆除しましょう



オオキンケイギクの特徴 (防府市提供)

朝来市内では外来生物「オオキンケイギク」の繁茂が問題になっていきます。

外来生物は生態系保全・生物多様性・自然環境に多大な悪影響を及ぼします。6月には和田山中学校の生徒達が円山川沿いのオオキンケイギクを駆除してくれました。

外来種の駆除は地域の人が外来生物の知識をしっかりと持ち積極的に駆除するのが近道です。今回はオオキンケイギクの特徴や駆除方法について触れていきます。

まず外来生物とは人為的に本来生息していない地域に持ち込まれた生物のことです。本来の生息地とは気候が違うことや天敵がいらないことで大繁殖し在来生物の生息地や食糧を奪うことで在来種を駆逐してしまうなど大きな問題になります。また海外からの外来種がよく取り上げられますが、本来北海道にはカブトムシは生息していませんでしたが現在北海道にカブトムシがいます。北海道のカブトムシは本州から人為的に持ち込まれた「国内外来種」です。

オオキンケイギクは北米原産の外来種で観賞用や法面緑化の目的で移入されたものが野生化してその繁殖力の強さから問題視されるようになり平成18年に外来生物法に基づき「特定外来生物」に指定され飼育、栽培、保管、運搬、販売、譲渡、輸入、野外への放出が法的に禁止され厳しい罰則が設けられています。また「日本の侵略的外来生物ワースト100」にも指定されています。



オオキンケイギクの葉

オオキンケイギクはキク科の宿根性の多年草で5月から7月頃に黄色い直径5〜7cmの花を咲かせます。花びらは8〜10枚で先端は4〜5裂しギザギザを呈しています。他のキク科植物のタンポポやヒマワリと同様に一つに見える花は多くの小さい花の集まり（頭状花序）で中心部分に筒状花（管状花）、外周の幾つかの花びらを持つ舌状花から構成されます。そのため多くの種を生産し1平方メートルあたり3万〜5万粒・過繁茂状態では7万粒の種を生産します。

葉はへら状で3〜5枚に分裂するものとし、ないものがあり束状に直立に近い形で細かい毛があるものが多い。写真を参考に花の中心部分まで黄色く、花びらの先はギザギザしている。葉っぱは地面から集まって立っているなどの特徴から判断し判らない場合は

詳しい人に見てもらうのがいいです。

駆除の方法は宿根性なので根から抜き取るのが一番ですが、花が咲く前に上部を刈り取ることで種を作らせないようにすることで減らすことができます。また、特定外来生物です。生体での移動は禁止されていますので刈り取ったり抜いたものはビニール袋などに入れ種が落ちないようにしてその場に置き、完全に枯れてから処分しましょう。

オオキンケイギクかどうかの同定・駆除については、朝来市市民課環境推進室（Greening）が協力していただけます。（梶原）



農産物直売所紹介④

めぐみの郷

和田山店 店長
南光 昭二様



店舗外観

めぐみの郷は、平成21年、G7グループ創業者である故木下守会長の「生産者と消費者をもっと近づけたい」という強い思いのもと設立されました。木下会長は長年、流通業界に携わる中で、農家の皆さんが心を込めて育てた新鮮な農産物が、市場取引や大規模流通の中で本来の価値を失ってしまう現状に強い課題意識を持たれていました。

市場では「見た目」や「規格」によって評価が決まり、味や品質、生産者の努力や思いが十分に伝わらないことも多くあります。また、生産者が適正な収益を得ることが難しい流通構造の問題にも直面してききました。こうした背景から、農家が丹精込めて育てた野菜や果物をできるだけ新鮮な状態で直接消費者のもとへ届ける仕組みを作りたい、その思いから誕生したのが「めぐみの郷」です。

社名には「太陽のめぐみ」「土のめぐみ」「自然のめぐみ」といった自然の恩恵を受けた農産物を大切にし、その価値を地域社会に広げたいという願いが込められています。同時に、生産者と消費者が直接つながり、お互いの顔が見える関係を築くことで、農産物の流通の新しい形を生み出したいという理念も表しています。



店舗外観

めぐみの郷の直売所最大の特徴は、「だれが、どこで、どのように育てたか」が明確にわかることです。通常のスーパーでは生産地や品種は表示されていても、実際に作った人の顔や思いまではなかなか伝わりません。しかし、めぐみの郷の直売所では、生産者の名前や生産地、生産方法などをきちんと表示し、生産者自身が直接持ち込んだ農産物をその日のうちに販売しています。この仕組みは消費者にとっても安心感や信頼につながるだけでなく、価格設定や商品の入れ替えを柔軟に行えるため、消費者の声をすぐに生産者へフィードバックできるメリットも多品種少量生産やよ

り高品質な農産物づくりにつながり、地域農業の活性化に貢献しています。さらに、旬の野菜セットや地元特産品の定期便サービスも展開し、SNSやウェブサイトを活用した情報発信やファンづくりにも力を入れています。また、農家や地域の特色を紹介するイベントや、消費者参加型の収穫体験なども積極的に実施し、小規模ながらも強く、持続可能な農業経営モデルを地域に根づかせようと日々取り組んでいます。現在、めぐみの郷は関西を中心に19店舗を展開しています。その中でも和田山店は、平成23年5月にオープンし、北近畿地域の農産物を中心に取り扱っています。特に「岩津ねぎ」をはじめとした地域特産品を都市部の消費者へ届ける役割が大きく、生産者の販

路拡大や収益向上、地域農業の振興に大きく貢献しています。和田山店では、単なる販売の場にとどまらず、地域コミュニティの交流拠点としても機能しており、地域行事やイベントへの協力も積極的に行っています。



特産品コーナー

配送体制についても、毎朝9時頃に冷蔵トラックで集荷し、夏場の高温時期でも品質を落とすことなく、新鮮で安心・安全な状態で消費者のもとへ届けています。冷蔵設備が整った配送網は、規模が大きくない直売所チェーンとしては珍しい特徴であり、それだけ消費者への安心感や満足度を高めることにつながっています。加えて、めぐみの郷では「フードロス削減」にも積極的に取り組んでいます。日本国内ではフー

ドロスが大きな社会問題として注目されていますが、特に農業分野では「規格外品」の扱いが課題となっていました。形やサイズが基準を満たさないだけで、品質や味に問題のない農産物が市場から外されてしまう現実がある中、めぐみの郷ではそうした規格外品を加工品に活用したり、ネット販売や産直市場での特価販売を行ったりしています。例えば、カット野菜や冷凍野菜、漬物、ジャムなどへの加工がその一例です。

また、地域の学校給食や福祉施設と連携し、食材として有効活用することで廃棄を減らす取り組みも進めています。こうした活動は、単なる利益追求ではなく、地域全体の豊かさや持続可能な社会づくりに貢献するものと

位置づけています。近年ではさらに一歩進め、「こども食堂」への食材提供もスタートしました。地域の子どもたちが安心して食事を楽しめる場を支援し、食育や地域交流にもつながる活動です。



編集後記

発行される頃には、稲刈りも最盛期を迎え、新米の販売が本格的に始まっていることと思います。この秋、「令和の米騒動」とも呼ばれる一連の動きも、ようやく一区切りがついているかもしれません。しかしながら、報道などでは消費者米価、つまり私たちが店頭で購入する際の価格ばかりが取り上げられる傾向があります。本来、米価はまず生産者米価が基礎となり、その上で流通や小売を経て消費者価格が決まっています。いくものだと考えています。

全国農業新聞

NATIONAL AGRICULTURAL NEWS

週刊 月4回金曜日発行
月700円、年8,400円
(消費税込)

発行所 一般社団法人 全国農業会議所
〒102-0084
東京都千代田区二番町9-8 中央労働基準協会ビル
電話 03-6910-1130 FAX 03-3261-5132
ホームページ <http://www.nca.or.jp/shinbun>

購読の申込みは農業委員会事務局へお気軽に連絡ください。

農業に従事されている方は誰でも加入できます

60歳未満の国民年金第1号被保険者(国民年金保険料納付免除者を除く。)であって年間60日以上農業に従事している方は誰でも加入できます。配偶者や後継者など家族農業従事者の方も加入できます。

家族一人ひとりの年金を！ 今、女性の新規加入者が増えています

詳しくは、農業委員会事務局、またはJ Aにお問い合わせください。